内分泌・代謝内科

（スタッフ）

部長　　：田中　克宏
主任医師　：白石　賢太郎
嘱託医　　：田原　康子
　　：渋田　加奈子
　　：藤島　理恵
専攻医　　：野村　卓也（４月から）
　　：谷村　悠希江（３月まで）

（診療実績）

糖尿病を主体とする代謝疾患、下垂体・甲状腺・副腎・電解質の異常など内分泌疾患の診療を行っています。外来は月曜日から金曜日まで毎日（３診）、医療機関からのご紹介、検診異常、他科からのコンサルトで受診される方が多く、新患・再来併せて１月あたり 1,400 ～ 1,600 名程度で昨年と同程度です（図１）。１型糖尿病を含むインスリン療法中の患者も多く、CGM（持続的血糖測定）、インスリンポンプなどの先進デバイスも取り入れています。検診での二次検査はスタッフと協調し、ブドウ糖負荷試験など効率よく対応できるように工夫しています。管理栄養士らによる栄養指導、糖尿病透析予防指導にも力を入れています。2022 年 11 月より糖尿病による足病変の患者を対象に看護師（有資格）によるフットケア外来を開始し、好評頂いています。毎月第３木曜日朝には外来待合で「糖尿病おはなしカフェ」を開催し、医師やスタッフが自己管理に役に立つ情報を提供しています。2022 年４月より外来待合に大型液晶テレビ（可動式）を設置し、糖尿病療養に関する動画を映写してセルフケア知識の向上を図っています。

入院は７階東病棟（循環器内科、膠原病・リウマチ内科、腎臓内科、心臓血管外科と共用）において、糖尿病の管理や合併症の治療、内分泌疾患のホルモン負荷試験などによる診療を行っています。入院患者の詳細を別表にお示しします（表）。糖尿病教育入院は１～２週間のクリニカルパスを用いて診療の質、日程を管理しています。毎週月曜日の病棟カンファランスでは、医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、検査技師、ソーシャルワーカーが当科入院中のすべての患者の治療方針を共有します。他科入院中の患者の併診（血糖管理）、NST（栄養サポートチーム）にも積極的に参画しています。2022 年は院内全体の COVID-19 患者受け入れに伴う病床制限のため紹介入院をお受けすることができなかったり、待機的入院を延期せざるを得ないなどの時期もあったため例年より入院患者数はやや少なく（図２）、緊急（重症）入院の割合が相対的に高くなったため在院日数は昨年より少し長くなっています。紹介元の医療機関の方々には、本年は上記理由でご要請に十分に応えることができず、大変申し訳なく存じております。

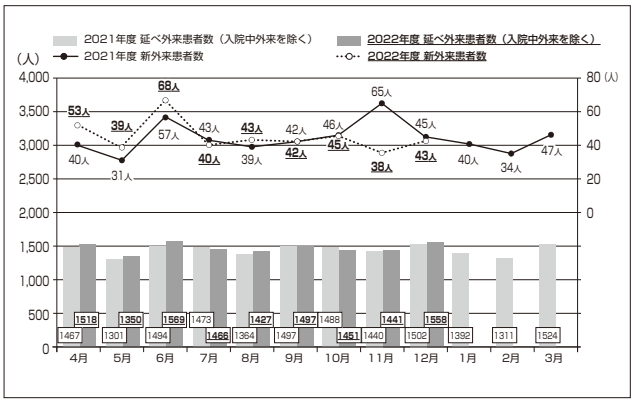

図１　外来患者数の推移

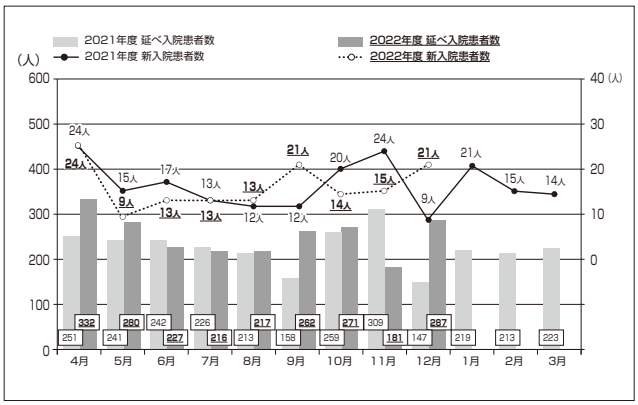

図２　入院患者数の月別推移

表　入院患者の疾患別内訳　（単位：人）

	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年
２型糖尿病	168	139	125	97
１型糖尿病	20	13	22	14
妊娠糖尿病、ほか代謝障害	1	3	14	22
低血糖症	4	3	3	0
甲状腺疾患	1	3	5	0
副腎疾患	5	2	5	6
下垂体疾患	2	6	5	9
副甲状腺、性腺異常など			2	0
腎障害	1	1	1	2
肥満症	1	1	0	0
電解質異常, 脱水症, 感染症など	36	40	26	35
COVID-19				9
合計	239	211	208	194

（今後の方向性）

厚生労働省による国民健康・栄養調査（2019 年）では、我が国の成人（20 歳以上）で「糖尿病が強く疑われる人」は男性の 19.7%、女性の 10.7%であり近年増加が続いています。糖尿病の管理不良は、視力障害、腎不全、下肢切断、虚血性心疾患、脳血管障害といった血管合併症につながり、生命や QOL を大きく損なってしまいます。大分県、大分市では人口当

たりの透析導入がいずれも全国上位にあります。腎障害を有する患者は心血管疾患リスクも高まるため、予防、連携医療が大切です。

当科では軽症から合併症の進行した方々、そして様々なライフステージの糖尿病患者の診療に当たっています。多くの診療科を有する当院においては、産科（妊娠糖尿病、糖尿病合併妊娠）、循環器内科（虚血性心疾患、心不全）、眼科（糖尿病網膜症）、腎臓内科（糖尿病性腎症）、皮膚科･形成外科（皮膚･足病変）など、他科・他部門の協力を頂きながら、一体的に対応して参ります。

糖尿病治療薬において、GLP-1 受容体作動薬、SGLT2 阻害薬は、大規模臨床試験で心血管・腎合併症の進行に抑制的効果を期待できることが示され注目されています。GLP-1 受容体作動薬は連日または週 1 回の注射薬ですが、内服薬も登場し話題となっています。持続的な血糖センサーであるフリースタイルリブレは当科では 100 名以上の外来患者が使用し、若年の方を中心にインスリンポンプ（ミニメド社、テルモ社）も導入しています。これらの先進的治療の使用経験を発信して参ります。

内分泌疾患は甲状腺疾患でご紹介をいただく例が増えていています。原発性アルドステロン症やそれに至らずともアルドステロン機能に関連した高血圧も注目されており評価を行っています。また、適応拡大が進む抗腫瘍薬の免疫チェックポイント阻害薬による内分泌系副反応（下垂体～副腎、甲状腺機能異常や 1 型糖尿病発症）は頻度が増えており他科と連携して対応しています。

糖尿病の治療において、患者の年代や生活背景は様々であり、それらを考慮した治療薬の選択、療養指導が不可欠です。当院においては専門医のほか、糖尿病看護認定看護師、糖尿病療養指導士の資格を有するスタッフを中心にきめ細かい指導ができるように取り組んでいます。高齢の患者、特に独居や認知症を有する方々も増えており、かかりつけ医の先生方とともに地域連携の充実を図ることが不可欠となってきていると感じます。そのためには地域で人材を育成していく必要があると考えられ、先生方やスタッフの皆さんの役に立つ情報を積極的に発信して参ります。県内の糖尿病関係者で運営する大分県糖尿病療養指導士認定制度につきましても同認定委員会ホームページをご参照いただければ幸いです。

先生方の医療機関で管理に悩まれる糖尿病患者、そして内分泌疾患が疑われる患者がいらっしゃいましたら当院連携室（097-546-7129）にお気軽にご連絡ください。よろしくお願いいたします。かかりつけ医の先生方に診て頂きながら数ヶ月に一度当科で評価、指導を行う連携診療も行っております。

（文責：田中克宏）